錦心流琵琶演奏会　四月二十八日（土）夕五時半東京上野本牧亭、主催一水会企画部。葉桜や月も木の間をちらちらと……。晴天に恵まれ盛会であった。桜狩―大沢妙水、吉野落―上梨楓水、衣川―成田双水、秋色桜―松本藷水、広瀬中佐―落合白水、西郷隆盛―河合桃水、巌流島―島田春水、山科の別れ―内田琴水、小栗栖―鈴木琢水、別れの盃―荻野甲水。

三位研修同志会例会　四月二十九日（日）昼一時東京三鷹上連雀公会堂。白虎隊―呉究静軒、竜の口―山崎光水、大高源吾―山本隆水、西郷隆盛―富田晴朋、武蔵野方丈記―大村鼓城、舟弁慶―坂本錦道、乃木将軍―生田晃堂、宮本武蔵―杉山旗水、広瀬中佐―篠宮侵水。尚次回は五月二十七日同所にて開催の予定。

榎本芝水春季演奏会　五月二日（水）昼東京日本橋東京証券会館ホール。第四四三回の上記を開催して盛会を極めた。広瀬中佐―吉田山水、東郷元帥―寺内峯水、桜狩―小谷深水、西郷隆盛―大森和水、別れの盃―向山美峯、五条橋―望月美水、常陸丸―木村東水、敦盛―西吟水、夢―会田映水、別れの国歌―柿木昌水、本能寺―長野秦水、川中島―野池信水、山科の別れ―小嶺妖水、湖水乗切―安藤敬水、羅生門―太白詩水、野田の笛―吉田梗水、伊豆の御難―坪井明水、白虎隊―加藤斐水、鉢の木―北沢来水、父・乃木将軍―榎本芝水。外に小唄三、奇術一。

尚秋の演奏会は十月十一日同所で開催予定。榎本師は去る二月二日東京国際善隣協会で六十余人の協会員を前に「滝口入道」を、アンコールに応えて「川中島」を追加演奏して大変な好評であった。

第一回赤心流春の大会　家元森鶴翁氏主宰の上記が五月三日（休）朝十時から静岡市の県婦人会館で開催され家元の吟詠「胡笳歌」を始め会員、相談役、来賓による詩吟、柔道吟、剣扇舞等百番が披露されて新緑の一日を飾り満員の聴衆を陶酔境に誘い込んだ。

薩摩琵琶浅野晴風独演会　五月八日（火）夕六時東京新宿安田生命ホール（入場料千円）。琵琶歴五十余年、今年六十八歳を記念して主催したもので盛会裡に終始した。門琵琶―合奏、敦盛―（熊谷）若林晴凌・（敦盛）山下晴楓・（絃）望月啞江。晴風独演（前席）潯陽江、（中席）安寿と厨子王、（後席）設楽ケ原。

◇予告◇

○…筑前琵琶青葉会演奏会　六月三日（日）昼十一時半大阪高島屋ホール、主催桝本旭風氏。京阪神旭会員多数の外東京原島旭粧（紅会代表）、京都矢吹旭美津（三美会代表）両女史ゲスト出演

○…京都琵琶協会六月定例茶話会　六月九日（土）午後一時京都北区西加茂大宮小野堀町五一　会長伊吹正陽氏宅（市バス御土居下車、電話四九二―四四八二番）

○…日本琵琶振興会六月例会　六月二十四日（日）正午―八時　東京新宿洲鳳会館

◇訃報◇

○…蔵本きよ子女史（一水会神戸支部長蔵本司水氏令閨）。心筋硬塞のため五月十一日午前三時十五分逝去、享年七十。病身の蔵本司水氏を扶けよき伴侶として貞淑の誉れ高い賢夫人であった。葬儀は十二日午後一時から兵庫区荒田町の宝喜院でしめやかに取行われ京阪神の琵琶関係者多数が参列して御冥福を祈った。（神戸市生田区山本通四丁目七一ノ五、電話　二二一―一七四九番）

あとがき

桜が散って風薫る新緑を楽しんだのも束の間、世は早くも初夏を迎えた☆やがて、又うっとうしい梅雨期に入って暫く悩まされることであろう☆本号は色々と時局向きの記事に追われて所謂「京絃の本旨」とする文芸的のものを多く掲載することが出来ず、執筆者、読者に申訳ない次第である☆編集子の手許には各地から寄せられた琵琶愛好者の参考となる貴重な原稿が山積している☆是等は次号以降に逐次登載して皆様の御期待に副う事にしたい。どうぞ楽しみにしてお待ち下さい。

昭和四十八年六月一日発行　（非売品）
編集者　植村寞水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一の二三
電話〇七二六（85）六〇五一番

琵琶機関誌　京絃　第二二八号　京絃社

薩摩琵琶の真髄と今昔感（四）

薩摩琵琶の発生と改良―武士道の表裏一体の発展―芸道の進展と二つの型―正派の緩慢的変様

東京　坂本錦道

さて、茲で薩摩琵琶の登場であるが、この芸道の始祖島津日新公は明応元年の生れであるから、同公が壮年血気の年令に達した時代は、前述の女歌舞伎の発生した時期と見るべきである。薩摩領主の同公は武士の教育に異常な関心を持ち、その教育の一つの方法として法師の弾ずる琵琶に着目し、その頃全九州に散在する琵琶法師の中から斯道の練達者や検校を自藩に召抱えて、琵琶の謡い方の改良を命じている。それまでの盲僧琵琶と称するものは、大体宗教用具として読経のあしらいの如きもので、平家物語を盲僧がとり上げた頃より、琵琶もその奏法が物語り的色彩を帯びて稍進展の跡を示して来たが、元来琵琶という楽器は陰律のもので、そこに陰湿の読経と合体すればジメジメと更に陰に籠る弊害を除去するため、陰より発する無常観を利用して勇壮ならしめるよう大干、崩れ、吟替りの曲節を挿入するという画期的の改良を加えてその骨格を定めた。こゝで同公も武士の士気の昂揚と精神的感化を考慮し、自ら作詞の武蔵野、華の香、迷語もどき等の名作が出ている。そこで今度は楽器の改良の点であるが、盲僧琵琶の柱は六つで柱の上の絃を押える旧来の楽器使用の定法を根本より覆して柱を四つと定めた（現在のもの）。そして柱と柱の中間の絃を押えて琵琶楽器本来の幽玄なる余韻を尊重する事になったのだから、之亦画期的の大転換であった。

更に楽器の本体は、旧来の小型のものからもっと大ぶりのものと形を改め、旧来腹板を三枚はいだものを一枚板にして覆手の下に支柱を入れた。撥も扇形として大きくし、撥使いも荒く活発な胴音が出る様に工夫され、最後に素材も盲僧時代のシオジ、栗材を廃して種々研究の結果、気品ある音色の出る桑材、桜材を発見し、全く面容を一変して薩摩琵琶器を完成せしめた。

薩摩琵琶は生れながらにして尊厳を有する徳性を帯びて、薩摩武士道の表裏一体となって発展し、やがて徳川後期に及んで二つに分流し、武士の間に行われるものが士風琵琶で、古老に聞くと禦乎たる威厳をもっていたという。今一つのものは町に下った町風琵琶と称し士風よりも数等砕けたもの、この二つが明治に至ったのである。

一方歌舞伎、舞踊に歩調を合せて発展して来た邦楽の部類は、概ね徳川泰平の期、人心の沈滞と頽廃期の花柳情趣、傾斜の巷を背景に生ぶ声をあげて来たもので、その二つの芸道の発想を比較すれば、まさに天地雲泥の差がある事に瞠目せねばならない。

人間社会のあらゆるものは千種万態、そして絶えず動き変態進歩を続けている。もろもろの芸術作品に至っても、その時点に於て至極のものと断定されても変転極まりない世相は更に新しい、すぐれたものを創作されて止まる所がない。その作品や技法は父より子へ、子より孫へ、師より門人へと伝承され、之を受け継いだ者は更に切磋琢磨と工夫を重ね、そこには個性と独創を加えて又進歩発展する。

この進歩の法則は時代の流れと社会全般の事象が流動変様するのだから、せき止める事も出来ない。

さて、そこに二つの型が出て来る。一つは古型を堅く守って、その芸をして更にみっちりと修練を加えて一層立派なものにせんとする消極的のものと、その二は普通云われる流動的修練の上に独創性を加えて、時流と共に進展して行く型である。

新しいからとて必ずしも良いとも云えないし、古いとて悪いとも云い切れない。その事例として伴彦四郎のもう一代遡った源流に妙寿がある。今日この源流を守っている人に辻靖剛師（妙寿の末弟子児玉天南門下）がいる。妙寿の技法を純金としてその純度を守り、決して異質のものを混入しないと云う凛乎とした古武士気質の人である。私も時々先生宅を訪れてこの妙寿の「謡切」などを拝聴しているが、その音色は必ずしも現代風正派のそれよりも遙か地味なものであるが、その音色は惻々として人の心に迫って来るものがある。

仮りに池田甚兵衛時代の弾法や歌唱法と、明治大正時代に高名を馳せた弾士のそれと比較したら、矢張り時流というものによって、その技法や歌唱方式に大変な相違が出て来ている。

薩摩琵琶が薩摩の国に止まって一地方の俚謡と、、あった場合は別として、少くとも日本中央の東京に進出して来て、都市文化の洗礼を浴びゝ　旨に至って、如何に正派は頑固者揃いと酷評されようが、その技法も逐次柔らか味を帯び著るしく精妙なものと変り、歌唱法も芋節式の角も丸味を帯び徐々に変様されて来た。只その変様が急激なものでなく、非常に緩慢の時間をかけて来たことは誰が見ても確かな事実である。（以下次号）

この稿参考書―演劇坪内士行、演劇通史、河竹繁俊、琵琶読本吉村岳城

我が道を行く六十五年（四）

西郷天風

斯様な状態で熱心に通いつゞける楽しみは、日毎に新たな喜びを生みつゝある某日、それは平素の如く別に案内を乞うでもなく、格子戸を押開けて一歩玄関に足を踏み入れた途端、ドキッとするほど驚いた。広くもない玄関ながら土間も靴ぬぎの石の上も、さては縁の上まで引越荷物で一杯である。突嗟に私の頭に浮かんだことは〃先生に何か不慮の事態が起り、東京を引揚げ国許へお帰りになるのでは〃と。私はよく荷物を見る暇もなく、勝手元で夕餉の準備をして居られる母堂に、少しあわて気味で問いかけた。

「先生はお国へでもお帰りになるのですか」

「はあ、どこでそんな話が……？」

問い返されて私は一瞬戸迷った。すると、

「あ、あれですか、あれは国のお友達が今度上京されるので、荷物が先に届いたのですよ」

なんと、それは当時噂の高かった薩摩琵琶の名家、伊集院鶴城先生のお荷物だったのであった。それ以来満留（みつどめ）先生出演の琵琶会が多くなり、従って私の出演する機会も度々与えられるようになったのであった。

つまり、琵琶の専門家である伊集院先生の要請による満留先生の出演には、必ず私がお供を承る慣わしであったから。

そうした中で、今日でも私の脳裡に深く刻まれて忘れ得ぬ鶴城先生の歌の一節がある。

小石川の春日町交叉点から白山方面への電車通り右側に、名は忘れたがちょっとした手ごろの貸席があった。そこは仲々有名な琵琶師の出演する会場として知られ、筑前琵琶の名人富永旭舞先生も殆ど此の会場を利用され、当時久野町に住んでいた私は殆ど毎回足を運んでいたものだが、或日伊集院先生演奏の「錦の御旗」が、今日でも私の耳朶にありありと再現され、いつも私の演奏に気迫とうるおいを与えて下さっている。

〃由良の港を見渡せば〃から〃松にかゝれる磯の浪〃まで、殊に〃松にかゝれる磯の浪〃の、「磯から浪」への節廻しのあたり、今でもその時の感銘を思い浮かべながら謡うのが私の常である。

さて、満留先生と伊集院先生との関係が前述の様であった為に、いつも客席ではそうした先生と肩を並べ同席することが多かった私は、心ひそかに誇りを感じていたものだった。

それ程当時の若人達の間には、琵琶に対するあこがれ、琵琶師に対する尊敬の念が高かった。それも琵琶以外に学生や若人達に適した芸能が無かった故でもあったろう。

この風潮は本場鹿児島から続々と大家名手の上京を促し、教授所や研究所の看板が各所

に現われ、各グループの演奏会が毎週各所の貸席や寺院の広間などで催されるに至った。

取分け四元兄弟が上京するに及んで斯界の形勢いよいよ活気に満ち、やがて四元義一師が明治陛下の御前演奏を承るに至って、琵琶を志す若人達の意気正に昇天の勢いとなった。

ところが、かくも殷盛を極めつゝある琵琶界に、突然大旋風の如き事件が捲き起った。

それは我が国の古典音楽として由緒ある芸能であり、風教上奨励に価するものとして特別に集会の自由を認められたであろう筈の琵琶会が、営利を目的の興業と同等に看做され、琵琶師も遊芸稼人の鑑札がなければ演奏会への出演は許されぬことになった。

それは明治四十二年の九月だったと思う。新たに〃警察犯処罰令〃という、誠にきびしい法律が布告されたが、その中には当時盛んになりつゝあった催眠術なども医療関係方面への考慮によってか、妄りに催眠術を施したるものという条文で規制されたが、琵琶会もこれと同じ様な観点におかれたらしい。

其頃琵琶の演奏会場として最も権威のある、しかも唯一の殿堂が神田橋外にある某高等女学校の講堂、和強楽堂であった。即ち、琵琶界唯一の檜舞台である以上、優秀な演奏家が技を争う晴れの場所であり、この舞台に出演するほどになれば、それは堂々たる琵琶名手の資格があるとなると、どうせ琵琶を味わうならこの殿堂へという訳で、毎週催される土曜と日曜の両日はいつも満員の盛況であった。

勿論今日と違って其頃は演芸の種類も詢に尠なかった故でもあったろうが、その中でも戦前から民衆に親しまれていた最大のものは浪花節即ち浪曲で、東京府内（当時は都といわず府だった）の数多い寄席の大半はこの浪曲によって維持されている有様だったが、その数多い寄席のうち屈指に価する寄席が、この和強楽堂に近い神田小川町にあった。神田市場亭というのがそれで、彼の浪曲界の大御所として当時一世を風靡していた桃中軒雲右エ門も常時出演する程の一流寄席だったが、久しく九州に引籠っていた雲右エ門が、頭を丸めて雲右エ門入道と名乗を替え、此の市場亭を買取ってその名も入道館と改め、浪曲の天下に君臨を試みた。（以下次号）

佐渡、新潟、東京、箱根旅行の記

田中鵬水

京都琵琶協会では、観光と各地同好団体との懇親を計るのを目的とした旅行会をつくって、毎年一、二泊乃至三、四泊の旅行を行い、一昨年は三泊四日の東北地方、昨年は琵琶湖畔一泊旅行をしたが、今年は四泊五日の首記を楽しんだ。

四月十九日夜十一時四十分京都発特急寝台列車に乗込んだ一行九人は直ぐ寝について、翌二十日朝八時二十分新潟着、小憩の後佐渡行三〇〇〇トンの豪華客船こがね丸で、畳の上を行くような静かな内に二時間十分で両津港に入港、昼食を済ませて予約の観光バス六時間、可愛いガイドさんや運転手の佐渡おけさを聴いたり、日蓮上人旧蹟、金鉱宗太夫坑その他の史蹟や名勝の見物、或いは絶景の長手岬を背景に乗車全員バスから降りて記念撮影をしたりして、六時半海辺のグランドホテルに落着いた。

佐渡は本州から海上六〇㎞、島の面積は周囲八五七㎞、人口約十万、わが国最大の島で、遠く日本列島がアジア大陸から分離した時に、北から一列に礼文、牡鹿、能登、隠岐、島根半島などと共に日本海に取残されたもので、北の大佐渡山脈、南の小佐渡山脈の二つが南西から北東に平行し、中央に広大な国仲平野や加茂湖があり、日本海の荒波を受けた海蝕による奇岩怪石は豪壮な海岸美を形成し、海辺到る所の絶景美観は言語に絶する。

また佐渡は古来知能犯、智識階級人遠流の地として知られ、万葉の歌人穂積朝臣、承久の変の順徳天皇、日蓮上人、文覚上人、日野資朝卿、観世元清その他の旧蹟が全島に散在し、相川の金鉱廃山跡の坑内は鬼気真に迫るものがある。

両津市は人口三万余、佐渡第一の繁華街で毎年四月島開きの行事を行い諸種の催し物等があって、当夜も劇場でおけさ踊りその他の民芸が観光客に披露され、ホテルの車が送迎

して呉れて地元の雰囲気を堪能した。

翌二十一日朝客船おとめ丸で両津を発ち、前日東京から来潟の鈴木流泉師や一水会新潟支部長樋口禁水師を始め支部員多数のお出迎えを受けて昼前新潟着港、そのまゝ今日の会場であり且今夜の宿泊所鉄道寮に案内され、昼食後十数名の支部員諸氏と弾交の半日を楽しんだが、流石に芸を誇る新潟の諸先生方の弾奏は何れも素晴らしく敬服した。特に地元諸氏の演奏は一人十分間に制限して京都側に充分の時間を与えられた配慮には恐縮した。

舟弁慶ー加藤友水、景清ー後藤甚水、桜狩ー山崎渓水、別れの盃ー樋口禁水、秋海棠ー野崎晞水、勧進帳ー伊藤啓水、利休の最期ー小島沚水、宇治川先陣ー宮田玲水、日蓮赦免ー富岡葦水、村上喜剣ー松橋聚水、外に五十嵐雅水、大越愛水、戸石一楓（以上新潟支部）。茨木ー植村寞水、西郷隆盛ー矢吹華水、彰義隊ー平井春嶺、新撰組ー梅原旭濤（以上京都）。逢坂山ー鈴木流泉（東京）　＝敬称略＝

そのあと懇親宴が開かれて美酒佳肴の接待を受け、宴酣となるや伊藤啓水師の手ぎわよい司会で素人離れのした隠し芸続出、時の経つのもわすれて愉快な一夕を過ごした。

翌朝（二十二日）八時四十分新潟発の上越線特急指定席で、伊藤啓水氏らのお見送りを頂き約四時間で東京上野駅着、一列車先に帰京された鈴木流泉師が出迎えて下され、今日開催されている日本琵琶振興会の例会場新宿の洲鳳会館に到着し、先着の新潟樋口禁水師を始め松田静水、望月啞江、大井錦淀、坂本錦道、仲川秀邦、西郷天風、早乙女千秋、若宮旭登、佐藤旭天紅各氏やその他の方々と久濶を序し、満員の列席者と共に左記諸師の名演奏に交って我々も弾奏の一席を汚し夕五時半辞去したが、錦琵琶の水藤錦穣先生が二十日の紅（くれない）会の三越劇場に於ける演奏会で「時雨曽我」の演奏半ばに舞台上で倒れ、病院に運ばれて療養中なるも今尚昏睡状態が続いていると、思いも寄らぬ話を東京で聞かされ、あまりの事に大きなショックを受け愕然としたが、旅程の変更不可能のため見舞にも行けず、後ろ髪を引かれる思いで全快を心に念じながら小田急に乗り、箱根強羅の紅葉闇押川旭葉女史方に一夜の宿を頂き、女史心尽しの山海の珍味を満喫して温泉に浸り、旅の疲れを癒して静かに憩った。

（東京側）　新納岳窓、富田晴萌、望月啞江、山田洲鳳、関口発水、寺内峰水、井上雅翔、中村菊鵬、杉山雅俊、若宮旭登、鈴木流泉、＝曲目不詳、敬称略＝

（京都側）　敦盛ー平井春嶺、高松城ー田中鵬水、湖水渡りー矢吹華水、井伊大老ー植村寞水

明くれば二十三日、いよいよ今日は帰京の日、本旅行中始めてゆっくりした朝を迎え、温泉につかって広大な庭園を散策したり、湯治滞在中の東京浅野晴風師ご夫妻と話し込んだりして、名物のとろゝそばで昼食を済ませ十四時三分小田原発新幹線こだま号で夕五時過ぎ京都着、天候にも恵まれて楽しかった四泊五日の懇親演奏旅行を終えて散会したが、二週間前に京都で観桜会をして既に新緑の葉桜を目のあたりにして来たのに、佐渡や新潟附近の汽車沿線では今が満開の真っ盛りで、今年は花見が二度も出来たのは思わぬ拾いものであった。

擱筆にあたり今回の旅行について終始格別の配慮を頂いた日本琵琶振興会長鈴木流泉師に対し深甚感謝の意を表する。

琵琶（錦心流）を楽しむ

田中敏水

趣意に積極的にご賛同頂きました絃友先輩琵琶愛好者（後援）の諸氏と、初回の集いを催してから早くも一年が経過しました。琵琶が何よりも好きで自由に謡いたいが、家庭では謡えない、云うなれば慾求不満？（娘がピアノ練習）、琵琶を聴き自身も弾いてみたい、さりとて昔の腕も老いぬれば駑馬にも劣る何とやらで、舞台演奏なんてとてもオッカなくてエトセトラ。恍惚防止になりますよね。

御参加の方々が邦楽、洋楽なんでも一声自由に歌い、人生を楽しく心の触れ合いに喜びを見出したい。人生半哀楽、好きな琵琶で楽

しむのも又一興か？

三月半ば御影町の高嶋邸にて（古稀を祝って）集いを持ちました。ピアノ教室場を開放、グランドピアノを移動して氏自ら立派な屏風をしたてられ、一同感激の裡に当主哮水氏の「恩讐の彼方」を序番にそれぞれ十曲を熱演、いよいよ目玉商品？　番匠氏の琵琶民謡（南部牛追うた外数番）に拍手と哄笑の渦に包まれ、中には浪曲をやりたいが伴奏を、と酒の酔いも手伝って無理というものあり、番匠氏に軽くいなされた一幕も愛嬌々々。

次いで四月十五日藤本錦掌邸にて、珍しく東京より水藤錦穣宗家を吉野への途次お迎えして集りました。当日は生憎く雨でしたが、却って樹々の青葉若嫩葉も一段の生彩を加え、大輪のひらどが満開で緑と赤の色どりは抜群。

先づ吟詠山中の月を藤本錦掌、佐々木吟光、丸田吟声にて合吟連吟、和歌朗詠と多彩な序番に続いて、大森彦七ー田中歉水、勧進帳ー番匠渚水、紅葉狩ー小塩梁水、敦盛ー高嶋哮水、吟詠富士山ー秋山儀水、山科の別れー野尻摂水、舟弁慶ー浅見汀水、別れの盃ー大橋戎水、琵琶民謡津軽山うた外五番を番匠氏が首を振り振りゼスチュアたっぷりの大熱演？民謡に琵琶伴奏は氏が一昨年から工夫し、民謡は心のふるさとなりと強い魅力にひかれて真剣に取組んでいられる由、でも民謡によっては絃にのらないものもあり、限度があると研究課程を一くさり……。

小憩の後名人水藤錦穣先生の「耳なし芳一」、歌「くれない」の斉唱によって始まる。そして二番手「衣川」の相田元子（唄）さんは声量もあり結構だったが、田中旭千栄師の絃が冴えず、物がものだけに之は一考を要する。

次の「王昭君」唄＝春日旭芳、絃＝原島旭粧及び「湖水渡」唄＝岸旭秀、絃＝押田旭窈は先づまづと云ったところ。続いて宮武旭豊師の「猿曳」だが、名人水藤錦穣師十八番の「うつぼ猿」に比して、今一つ何か訴えるものが弱くて、折角の熱演に拘らずいささかお気の毒であった。

このあと仲川秀邦さんの「若き敦盛」を始め「清水一角」の原旭汐、原島旭粧師の「壇の浦」、押田旭窈さんの新曲「三島由紀夫の自決」などは、何れ劣らぬ老練の名に恥じぬ立派なものである。

更にまた、本年の紅会は、琵琶演奏の外に吟詠舞四番を組入れたことは一つの企画としては結構だが、「月山城趾」の立方中村恵子を始め「上月落城の賦」に於ける徐永祥、「出雲の竜虎」の徐正和…と、何れも〝踊り〟が固く、且つ些か迫力に欠けるうらみが散見されて、これは期待はづれ。之に反して賛助出演された若水桜松師の「新撰組」と云い、又「高田の馬場」の吾妻江風さんと云い、流石にベテランの芸達者揃いとて、会場を埋め尽した一杯の聴衆はたゞ酔えるが如く盛んな拍手、声援が乱れ飛んだのも当然と云えよう。

そしてこの直後、お止めの水藤錦穣さんが、「時雨曽我」の演奏中に突然舞台に倒れて紅会の終演は想いも寄らざる不測の事態により、やむなく急遽幕をおろす結果となったのは、大変残念なことであった。（邦楽評論家）

第十二回紅会（筑前）を聴いて

早乙女千秋

「紅会」が三越劇場に会場を移して早くも今年は三年目ー。それも、年に一度の大会とあって客足もよく、開演後まもなく八、九分の入りという盛況さは、去る正月の「名流琵琶大会」以来のことで、その幕あきは、会場の上手寄りに正絃会寄贈の盛花が美しい。

正午キッカリに押田旭窈師以下紅会の八師が、何れも揃いの黒の床着姿も清らかに、会

錦びわ宗家

水藤錦穣（富美）女史

四月二十五日午後零時四分脳出血のため東京両国の加藤病院にて逝去。享年六十一。

四月二十日東京三越劇場に於ける紅会の演奏会にゲスト出演「時雨曽我」熱演半ば演壇上に倒れ直ぐ病院に運ばれたが、昏睡状態のまゝ遂に再起することが出来なかった。

女史は明治四十四年十一月二十日東京に生まれ、九才で村中堂水氏に琵琶の手ほどきを受け、令兄中村桜統氏について修業後水藤枝水氏に育くまれ、女流数十人の中から抜擢、永田錦心師から総伝を允許された。

大正十五年錦心師着想の錦琵琶の創始研究に入り、筑前琵琶の弾法を取入れたり邦楽の節調を加えたりなどして遂に独得の五絃五柱の錦・琵琶を完成。「曲垣平九郎」外数曲は世に定評があり神技として他の追随を許さず、又頗る芸熱心で三越劇場での演奏中に倒れて人事不省に陥っても、尚且つ愛器の琵琶をしっかり抱いて手から放さなかったと云う。

女史の他界は全琵琶人の悲しみで一掬の涙を禁じ得ず、琵琶界にとっても大きな損失であると云わねばならぬ。然し女史が生前琵琶を通じて国民の思想善導に貢献した功蹟に対し、破格の勲五等旭日章を贈られた事は非常な名誉で、せめてもの慰めであろう。茲に謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

尚告別式は日本琵琶協会葬として五月八日。午後一時から台東区鳥越二ノ一三寿松院で厳粛に取行われ、遠近の琵琶人多数が参列焼香した。喪主水藤五郎氏（練馬区旭町三丁目二二ノ四、電話九三〇―四四九八番）

三物故会員合同追悼演奏会

昨年物故した京都琵琶協会員中島真水、小林旭光、大滝旭雄三氏の合同追悼演奏会が、若葉薫る五月十三日（日）協会の主催で京都東山安井金比羅宮会館で開催された。天候にも恵まれて境内の新緑がすがすがしい中に十時半、三故人の遺影を安置した祭壇を前に宮司の玉串奉典で追悼の儀式が始まり、各御遺族、協会員礼拝の後予定通り演奏開始。舞台には遺影を中心に両袖に生花や、昨年春の演奏会で演奏直後に倒れた小林旭光氏生前寄贈の紫地に白字抜きの「京都琵琶協会」の会旗が飾られ、厳粛裡にプログラム通りの熱演が続いて故人の霊を慰め、開演前から詰めかけた聴衆は二時頃には廊下にまで溢れる超満員の盛況を呈した。五時半全演奏終了、供養膳に着き在りし日の三故人を偲び冥福を祈って散会した。

（献奏者と曲目）門琵琶―有志、母の教―才田明美・平井衣子、別れの盃―西村とみ、伽羅の兜―山崎旭栄、城山―山本嶺舟、禅師と正宗―田中鵬水、月下の陣―牧南水、常陸丸―水内嬢水、石童丸―伊東旭山、録音白虎隊―故中島真水、同鳴呼尼港―故小林旭光、同那須与市―故大滝旭雄、曲垣平九郎―安住旭康、新撰組―梅原旭濤、広瀬中佐―阪本一峰、若き敦盛―戸倉旭嶺、彰義隊―平井春嶺、西郷隆盛―矢吹華水、井伊大老―植村寞水、柳の精―若宮旭登、本能寺―木村維水、大徳寺―戸田旭公。

第十四回近県交流　春のびわ会　奏会は今年から四回とし今回は秋田、酒田、鶴岡から名手を招待して四月十五日（日）昼零時半から新潟三業会館に於て開催盛会であった。主催一水会新潟支部。桜狩―菅野暁水、分水の桜―古山胡水、舟弁慶―松橋聚水、潯陽江―加藤茜水、別れの盃―中野片水、川中島―宮内玲水、佐野の夜語―大越綾水、西郷隆盛―野崎啅水、羅生門―酒田池田青水、雪晴れ―鶴岡辻有水、三成の最期―秋田松井灯水。

京都琵琶協会月例茶話会　①四月十五日（日）昼一時から会員平井春嶺氏宅に入洛中の埼玉県大井錦淀氏をゲストに迎えて開催。兎もすれば心浮き立つ花の季節に終日の春雨で却って落着いた気分で弾交を楽しみ且芸談に花を咲かせて夕食を共にし八時前散会した。彰義隊―平井春嶺、井伊大老―植村寞水、禅師と正宗（上）―田中鵬水、同（下）―安住旭康、秋風故郷の山―戸田旭公、本能寺―木村維水、桜狩―牧南水、別れの盃―矢吹華水、新撰組―梅原旭濤、桜井の駅―伊吹正陽、茨木―大井錦淀、演奏なし―古谷竟水。

②五月三日（休）昼一時会員梅原旭濤女史宅で開催、青葉若葉の薫香を満喫しながら左の通り演奏のあと女史の心の籠った名物たけのこ料理に舌鼓を打って八時解散。

月下の陣―牧南水、禅師と正宗―田中鵬水、毒まん頭―古谷竟水、大徳寺―戸田旭公、実盛―木村維水、敦盛―平井春嶺、鳥辺山―植村寞水、西郷隆盛―矢吹華水。

外に伊吹正陽、梅原旭濤、安住旭康、水内嬢水各氏出席。

武絃会、一水会多摩支部合同研修会　一時小金井市福祉会館にて開催。羅生門―中島瀑水、西郷隆盛―富田晴萌、竜の口―佐藤皓水、舟弁慶―伊藤磐水、伊豆の御難―中村修水、井伊大老―村木桜柳、元冠―清水源城、高徳題桜―大村鼓城、戦艦大和―坂本錦道。六時閉会。

②五月六日（日）一時から同所に於て開催。白虎隊―呉究静軒、吹雪の敵―富田晴萌、城山―工藤琴秀、捨児―高杉洲靖、西郷隆盛―中島瀑水、潯陽江―石井敦水、小栗栖―伊藤磐水、竜の口―中村修水、会津の華―杉山旗水、別れの盃―杉山桜正、信長と義元―大村鼓城、舟弁慶―坂本錦道。六時閉会。

筑前琵琶第十二回紅会　日本橋三越劇場。五時半極めて盛会の裡に閉会したが、曩に同人青山旭光女史を失い今又水藤錦穣師が本日の演奏半ばに倒れたのは重ねがさね残念であった。（別項参照）　早乙女千秋氏寄稿「紅会を聴いて―」

靖国神社春季例大祭奉納芸能大会　四月二十一―二十三日同神社能楽堂。三日間に亘り古武道、詩吟、剣舞、奇術、浪曲、民謡、舞踊、能狂言等の奉納に交って琵琶は二十一日広瀬中佐―井上洋水・二反田岳水外二氏、城山―新納岳窓・大塚岳峻・曽我竜城。二十三日吉野山懐古―橋爪誠濤外五氏・絃桑名洲聖、大楠公―竹下翠風、広瀬翠紅外七氏。以上奉納盛況であった。

日本琵琶振興会四月例会　午―八時東京新宿洲鳳会館で地元琵琶人多数の外京都琵琶協会員を来賓に迎えて演奏会のあと琵琶楽器の修理法を会長鈴木流泉氏が実地指導して盛況裡に閉会した。（別項田中鵬水氏寄稿の旅行記参照）

第五回春季薩摩琵琶弾奏大会　昼鹿児島市の県婦人会館、主催南日本新聞社・南日本放送・薩摩琵琶同好会。春日野―相良長徳、春の調―山下鷺、送別―藤崎正、菅公―武豊、七卿落―中村照子、小松操（二）―桜木誠、老の坂―福島瀑水、潯陽江―石井敦水、小栗栖―伊藤磐水、竜の口―中村修水、会津の華―杉山旗水、別れの盃―杉山桜正、信長と義元―大村鼓城、舟弁慶―坂本錦道。六時閉会。

春の琵琶演奏大会　四月二十二日（日）昼松山市民会館、主催愛媛琵琶連盟。君が代―有志、石童丸―原田旭悠鳥・舛沢旭悠綾、頂羽―斉藤旭苑、山頭火―木村旭照、鴨川の露―井出旭明、高田の馬場―湯藤旭窓、羅生門―遠藤旭佳、禅師と正宗―和田旭秀・白石旭優、戦艦大和―西森旭生、鴨川の露―村上旭隆、本能寺―栗田絲水、隅田川―京関旭彰、敦盛―佐藤晃絃、安宅の関―森脇旭悠、舟弁慶―佐竹旭都、大楠公―升久旭好、巌流島の決闘―浅田芦水・剣舞尺八付、坂本竜馬―谷口旭英、伊豆の御難―宇和島佐々木耶水。

醍醐寺桜祭諸芸大会　京都醍醐寺では豊太閤観桜の宴の昔を偲び毎年四月に首記が催されるが今年は大阪琵琶同好会が之に協賛し四月二十二日昼一時から同寺信徒詰所に於て他芸能に交って琵琶を演奏し三百の参詣人を喜ばせた　那須与市―作花旭友、花の白虎隊―多和綾子、屋島の誉―宮之原聖水、赤垣源蔵―水谷旭甫、川中島―養老鬣水、阪本竜馬―中山鳳水、松の廊下―大西旭明、本能寺―辻旭城、姫ゆりの塔―石橋旭嶺、井伊大老―寺尾旭吉栄、那須与市―中島旭穂、那智の荒行―美登里進水、琵琶桜―天津八千代外四人・尺八付。外に詩吟四、民謡四、日舞二、狂言一、端唄一、奇術一。

古典音楽ゼミナール琵琶楽を聴く会　四月二十四日（火）東京虎の門霞山会館に於て日本雅楽会主催第九回首記が催され講師望月啞江、実演鈴木流泉両氏による「名月逢坂山」を披露した外ジョージ・ギッシュ氏も琵琶に関する講話と実演をしたが参聴者約六十人の殆どが若い男女で占め琵琶に対する認識を深めた模様で意義のある一夕であった。